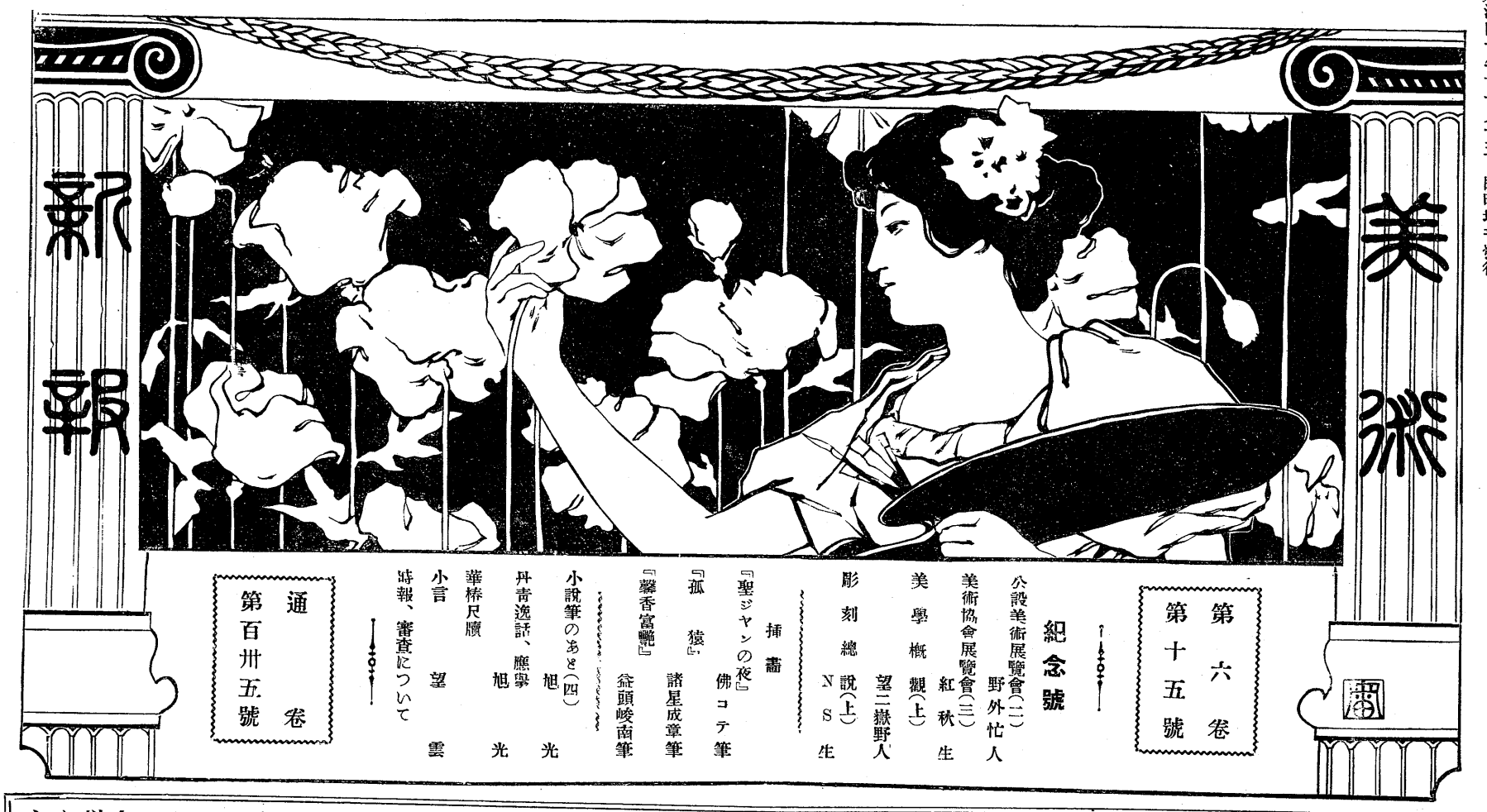
毎月二回（五日、二十日）發行
明治三十五年三月二十七日第三種郵便物認可
明治四十年十一月十五日臨時增刊發行



第六卷
第十五號

紀念號

公設美術展覽會（二）　野外忙人
美術協會展覽會（三）　紅秋生
美學概觀（上）　望二嶽野人
彫刻總說（上）　NS生
挿畫
『聖ジャンの夜』　佛コテ筆
『孤猿』　諸星成章筆
『馨香富艶』　益頭峻南筆
小說筆のあと（四）　旭光
丹青逸話、應擧　旭光
華梼尺牘
小言　望雲
時報、審査について

通卷
第百卅五號

紀念號

○何が故に紀念號といふや、明治四十年を紀念するが故なり。何が故に紀念號を出すや、博覽會號を出せし本誌の玆に秋に於る紀念の爲なり。而して何が故に此十一月に於ける臨時增刊の紀念號を出すや、是れ今秋の文部省の第一回美術展覽會を共に紀念する爲なり。顧みれば吾が明治四十年は美術界に於て極めて事多き年なりき、而して又紀念すべき年なり。乃ち吾人は近く此年と別れんとするに臨み、特に此秋、此十一月に於て公私展覽會の上野の秋色と爭ふものあるを以て、特に此紀念號を諸君の前に提供するものなり。讀者諸君は其名の殊にして實の等しきを怪しむ勿れ、是れ吾人が只單に紀念の爲にして敢て之を世に沾らんとする者にあらざるが故なり。

○量と質との對照　文部省の第一回展覽會に反抗する會は同じく上野の山内に於て僅に數十歩を隔て相對抗せり。而して此對抗は軈て二者の一大對照を實現せり。美術協會が千に近き大小の作品を所狹しと陳列せるに反して、第一回美術展覽會は日本畫に於て僅に百に上らんとするに過ぎず。即ち十對一＝一割といふ比例を示せり。而して此數量の多少は直ちに此相對抗せる二會の成功を算するの標準たるか、吾人は之を事實に見て、決して此少き數量の多大なるものに對して遜色あるを認めざるなり。否な却つて世人は、或は物珍らしさに驅らるゝの素あるによらんも、大に此少きものに向つて奔れるにあらずや。吾人は是に於て彼の量に對する質なるものを思はずんばあらず。即ち一は量に於て勝ち、一は質に於て勝つものあるを對照して面白しと感ずるものなり。よし其量こそ少しとも、其着想、其描法に於て何物かを求めんとして憧憬し、而して之によつて多大の苦心と勞力とを拂ひ、以て自ら其個性の發現を職として成れるものゝみなれば、時代の要求は之と交渉し之と接觸せんことを望めり。是に於てか世人は決して之を看過せずして、熱心之を迎へ寛懷之を歡んで、多少の疵瑕は之を問はざらんとす。乃ち吾人は此現象を見て、是れ質を根本義として立ち、量と沒交渉なりと言ふものなり。若し之を極端に推して言へば、即ち千羊の皮遂に一狐の腋に如かずとの古語以て移して之を評すべきか。吾人は今此現象を見て感あり。量と質との對照今後に考ふべきことならずとせんや。

○二日月の模倣　今夏七月即半歳ならざるの昔に出でし博覽會の二日月は殆ど之が壘を摩するの出來榮えを以て模倣せられたり。然も一は美術協會に、一は无聲會に、以て如何に其勢力ありしかを見る可し、然も是れ端なく吾誌の批評に此原畫の必ずしも世論の如く深く作家を問ふを要せず、他人亦之を能くせんと言ひしものゝ實現證左の資となれり。されど玆に吾人の問ふ所は其模倣家の人格なり藝術が個性の表現なるを知らざるを責んとするなり。藝術家獨立の責務を知らざるを叱せんとするなり。吾人は將來に長く此如きを斷たんを望み、特に之を一言す。

『聖ジャンの夜』　佛コテ筆